

## 「眠りから覚めるべき時」ローマ人への手紙13章8節～14節

「あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。」 ローマ人への手紙13章11節～12節

## 今 日 の メ ッ セ ジ 要 旨

○使徒パウロがキリスト者の社会生活について語っています。冒頭で「だれに対しても、何の借りもあってはいけません」と言っているのは、その後の「ただし、互いに愛し合うことは別ですよ」ということを言いたかったからでしょう。パウロは「愛を基として生活するよう」勧めているのです。ここでの愛は、ギリシャ語のアガペー（神様の愛、永遠に続く愛、無条件の愛）、フィレオ（友情、信頼、絆）、ストルゲー（親子の愛、家族愛）、そしてエロス（男女の愛、恋愛）の内、アガペーを指しています。パウロは神様の愛に倣って、他の人を愛していけば、律法を全うできると語っているのです。

○このように、「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな。また他にどんな戒めがあろうとも、お互いに隣人として愛を実践していくならば、律法を全うしたことになる」という考え方は、パウロが最初ではありません。実は、律法の中心的な精神を重んじるという考え方には、パリサイ派の長老ヒレルが率いるグループにも見られました。他方、長老シャンマイに率いられた人々は律法の一点一画を守ることに厳格で、イエス様とことごとくぶつかったのでした。もちろんイエス様も、パウロと同じ考え方です。

○12節以下に「夜はふけて、昼が近づいた」とあります。今あなたのいる場所がどんなに暗くても、必ず夜は更け、昼が近づいてくる。明けない夜はないのです。このあと続く聖句は、古代西洋最大の教父と言われた聖アウグスチヌスを回心に導いた聖句として知られています。彼は若い頃、放蕩に身を持ち崩し、母を泣かせ、妻を泣かせ、子を泣かせて、多くの人を傷つける生活をくり返しました。しかし、ミラノの司教アンブロシウスと出会い、その教えを聞いて、自分の罪に気づきはじめます。悪い眠りから覚めるべき時が近づいていました。そんな折、庭園を歩く彼に「取って読め、取って読め」という子どもの歌声のような声が聞こえてきたといいます。そして、手元にあった聖書を取って開いたところ、「夜は更けて昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません」という御言葉通り、彼はそのままの自分をイエス様に委ねて387年のイースターに家族そろって受洗しました。母モニカの長年の祈りが聞かれ、アウグスチヌスは第2の人生へと踏み出したのです。御言葉にはこのように人を変える力があるのです。私たちにも忘れられない聖句がある筈ですね。「あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです」。アドベントにふさわしいこの御言葉を心にとどめ、今週の歩みを始めようではありませんか。